



Title	『後葉和歌集』の構成および性格
Author(s)	佐藤, 明浩
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1988, 22, p. 21-44
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/50002">https://hdl.handle.net/11094/50002</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 『後葉和歌集』の構成および性格

佐藤明浩

## はじめに

『後葉和歌集』は平安末期に数多く編まれた私撰集のうちのひとつである。撰者の藤原為経は、為忠の子、常盤三寂の一人である。本集の成立は久寿二年（一一五五）十一月、翌年正月と考えられ、<sup>(1)</sup>当時、為経は出家して、法名を寂超といった。序文の記述から明らかのように、『詞花集』に対する不満から、これを撰び改める意識で編まれた集である。

本稿では、撰者為経の選歌意識、構成意識につき具体的に検討していくことによって、『後葉集』の性格および和歌史上の位置を考察していく。

## 一 為経の選歌意識

『後葉集』の選歌資料として重視されたもののひとつに『堀河百首』がある。<sup>(2)</sup>まず、この『堀河百首』からの選

歌に視点を定め、為経の態度を検討していく。  
『堀河百首』には、様々な先行作品を典拠とした歌が含まれている。いま、『詞花集』『後葉集』『続詞花集』『千載集』

表Ⅰ 堀河百首歌の典拠

堀河百首歌 歌入集数	典拠							歌集
	その他	後拾遺集	拾遺集	後撰集	古今集	万葉集	詞花集	
10	出典不明歌 1	1	0	0	2	1 (+1)	詞花集	
37	伊勢物語 出典不明歌 1 1 1	0	4 (+1)	0	6 (+1)	0	後葉集	
19		0	0	0	2	2 (+2)	続詞花集	
77	日本紀 伊勢物語 曾丹集 和泉式部集 和漢朗詠集 山海經 1 3 1 1 (+1) 1	1	4 (+1)	3	7	10	千載集	

橋本・滝沢『校本』古注・索引編所収の古注および慈延『堀河院初度百首抄』に指摘されている典拠の数を示した。なお（ ）内は、私見により加えうると考えられる数である。

載集』の各々に採られている堀河百首歌が、どのような作品を典拠としているか、表Iに一覧しておく。ここで注目されるのは、『万葉集』の歌を典拠とする堀河百首歌が、『後葉集』には一首も採られていないということである。

『詞花集』の巻頭には大江匡房の堀河百首歌が置かれており、これは万葉的表現を含んでいる。

① こほりゐししがのからさきうちとけてさざなみよする春かぜぞふく(詞花集 卷一・春上一)

楽浪之ササナミノ 思賀乃辛崎シガノカラサキ 雖幸有サキクラレド 大宮人之オホミヤヒトノ 船麻知兼津フネマチカネツ(万葉集 卷一三〇 人麿)<sup>(3)</sup>

『後葉集』以前の平安朝和歌には、「からさき」を詠んだ歌はわずかしは見出せず、それらの中には「さざなみ」の語をもとに詠み込んでいるものはない。匡房歌は、「楽浪之」の万葉集歌に直接的に依拠しているとみられる。この歌を『詞花集』が巻頭に据えたのに対し、『後葉集』はこれを除いている。

次の堀河百首歌も『後葉集』では除かれている。

② わぎもこがこやのしのやのさみだれにいかでほすらんつびきのいと(詞花集 卷二・夏六六 匡房)

「こやのしのや」という語句は、『万葉集』卷十三所収の長歌「刺將焼サシヤカム 小屋之四忌屋コヤノシキヤニ 搔將棄カキスデム 破薦ヤレゴモヲ 敷而シキテ」(下略)「(三三八四)にみえる「小屋之四忌屋」が訛伝して生じたものであろうか。あるいは、

あしのやのこやのしのやのしのびにもいないなまろは人のつまなり(古今和歌六帖 第五二九八〇)

に拠ったのであろうか。確かなことはわからない。しかし、初句の「わぎもこ」の語の使用をも考えあわせると、  
 ㊤の歌は万葉的表現を含んでいるとみられていたと考えてよいであらう。

以上のような万葉撰取歌は、『後葉集』において排除される傾向にある。それでは、『堀河百首』から、どのような作が好んで採られているのであろうか。表Ⅰからもわかるように、『古今集』や『拾遺集』の歌に依拠した作が多い。例えば、次のような歌である。

㊤きのふこそ秋はくれしかいつの間に岩まの水のうすごほるらん（後葉集 卷六・冬一九八 公実）<sup>(4)</sup>

きのふこそさなへとりしかいつのまにいなばそよぎて秋風の吹く（古今集 卷四・秋上一七二 よみ人しらす）  
 昨日こそ年はくれしか春霞かすがの山にはやたちにつけり（拾遺集 卷一・春三 赤人）

㊦おほあらしの杜の紅葉は散りはてて下草かるる冬はきにけり（後葉集 卷六・冬一九九 藤原顯仲）

おほあらしのもりのした草おいぬれば駒もすさめずかる人もなし（古今集 卷十七・雜上八九二 よみ人しらす）

この㊤㊦の後葉集歌は、冬部の巻頭部に二首連続している。撰者が、古今集歌の語句を用いた歌を、ことさら前面に押し出そうとした結果であらう。また、一首からだちに典拠歌が想起されるような、典拠歌の語句を生硬な形でとりこんだ歌が好まれているらしいことにも、注意しておきたい。

『堀河百首』からの撰歌状況を検討することにより、撰者は万葉撰取歌に対して消極的ないしは否定的態度で臨み、逆に、三代集、ことに古今集歌を典拠とする歌は積極的に採っていることがわかった。堀河百首歌以外の歌に

も目を向けて、この態度を確認しておきたい。

『詞花集』精撰本には四首の久安百首歌が採られていた。このうち、三首までは『後葉集』にも選び残されたが、次の一首は除かれた。

あまのがはよこぎるくもやたなばたのそらだきもののけぶりなるらん（詞花集 卷三・秋八八 顕輔）

この歌は、『詞花集』所収の顕輔歌六首のうち、『後葉集』でただ一首除かれたものでもあった。『詞花集』に撰者顕輔が自選した歌については、為経もその意向を尊重して、そのまま選び残す方針をとったのであろう。そのなかで、この一首のみを除いたところには、何か特別の意味が籠められているように思う。<sup>(5)</sup>「あまのがは」の顕輔歌について、顕昭『詞花集注』は、

ヨコギルクモハ、万葉云、

アラヤマヲ横殺雲ノイチシルクワレトエミシテヒトニシラスナ（卷四六九二）

と注記しており、「よこぎるくも」が万葉語であると意識されていたらしいことがわかる。為経は、万葉語を含む歌を極力除こうという方針によって、この顕輔歌をあえて採らなかったのであろう。

ところが、『後葉集』には、『久安百首』からは、万葉集歌に拠った作が若干数採られている。

⑤ みごもりに 芦のわか葉ももえぬらん 玉江の沼をあさる 春駒（後葉集 卷一・春上三三 清輔）

ミシマエノ タマエノ コモラ シメシヨリ オノガ トゾイモラ イマダカヲネド  
三嶋江之 玉江之 薦乎 従標之 己我跡曾念 雖未刈（万葉集 卷七・一三五）

みしま江の玉江のあしをしめしよりおのがとぞ思ふいまだからねど（拾遺集 卷十九・雑恋二二三 人麿）

⑥としふともなはいはしろのむすびまつとけぬものゆゑ人もこそしれ（後葉集 卷十二・恋二三四〇 顯輔）

磐代之イハレノ 野中ノナカ 爾立有ニタテアル 結松ムスビマツ 情毛不解コヨモトキズ 古所念ムカシオモヘバ（万葉集 卷二二四四）

しかし、これらは『堀河百首』の万葉撰取歌とは異なる面をもっている。『堀河百首』のそれは例えば次のようなものであった。

①そまがたにみちやまどへるさをしかのつまどふ声のしげくも有るかな（千載集 卷五・秋下三〇八 公実）

②かへりこむほどもさだめぬわかれちは都のてぶりおもひいでにせよ（同 卷七・離別四七九 公実）

①の「そまがた」、②の「都のてぶり」は、いずれも万葉集歌に拠った語句であり、当時の歌学においてその語義が問題にされていた。<sup>(6)</sup>これらの歌では、こうした難解な万葉語をことさらに詠み込むことが、むしろ眼目となっているのである。①②はいずれも『千載集』に入っている。『後葉集』とは対照的に、このような問題作をも『千載集』は採っている点、両集の差異が示唆されているようで興味深い。

前掲③④の久安百首歌は、これら『堀河百首』の万葉撰取歌とは趣を異にしている。

⑤の歌にみえる「（いはしろの）むすびまつ」は、平安朝の和歌にも詠まれていた。

あやしき事いひける人に

結びきといひけるものをむすび松いかでか君にとけてみゆべき（小町 I・八）<sup>(7)</sup>

『相模集』（相模Ⅰ）の長歌（五九三）にも「よしやかけても いはしろの むすびまつなる かなければ そのゆかりをば かこたねと」とある。挽歌である万葉集歌の語句を恋歌に用いるのは、頭輔歌にはじまるのではなく、このような王朝和歌の先例があったのである。

④の場合、万葉集歌そのものではなく、『拾遺集』に採られた形に拠っているのである。それは措くとしても、「みごもりに」の清輔歌は、「玉江」という地名を典拠歌に学びながら、それとは趣の異なる、清新な叙景歌となりえている。そのなかにあって、「玉江」という快い響きをもった地名も、新たな喚起力をもつに至っているのである。新奇さをねらった万葉語の使用とは異なるといえるであろう。

これらの久安百首歌は、同じく万葉撰取歌というものの、典拠歌の表現が平安朝の和歌に継承されている点、または、ことさら珍しさをねらって万葉語を用いたのではなく、典拠歌の詞句が一首に充分消化吸収されている点、先の堀河百首の場合とは異なる。このような歌を採っているところに、為経の姿勢がかえってはっきりと読みとれるのではないか。為経は、あくまで三代集時代の歌語を歌作の規範と考え、そこからの逸脱には批判的であったのであろう。逆に、『万葉集』中の表現であっても、三代集の世界に継承されているものは、これを排除しないのである。

『詞花集』に十七首採られ、入集数第一位であった曾禰好忠の歌が、『後葉集』では九首（入集数第九位）に減らされている。好忠は万葉語や俗語を用いて型破りな歌を詠んでいるが、『詞花集』にも万葉撰取歌といふべきものが含まれている。例えば、



みよしののきさやまかげにたてる松いくあきかぜにそなれきぬらん（詞花集 卷三・秋一〇）

がそれで、「きさやま」は、『奥義抄』の「出万葉集所名」のなかに「きさの中山大和也」とみえ、平安時代末期には万葉の地名とみられていたことがわかる。このような歌は、『後葉集』では除かれている。万葉語や俗語を大胆に用いて特異な歌を詠出した好忠に、為経はもともと否定的な評価を下していたのであろう。その好忠を『詞花集』が集中第一の歌人として遇しているところに、為経の批判の眼が注がれていたにちがいない。

『後葉集』所収の好忠歌九首のうち、八首までは『詞花集』から選び残されたものであったが、次の一首のみは新たに加えられた歌である。

かたをかのゆきまにねざすわかくさのはつかにみえし人ぞこひしき（後葉集 卷十一・恋一二九）

この歌は、次の古今集歌と類似している。

かすがののゆきまをわけておひいでくる草のはつかに見えしきみはも（古今集 卷十一・恋一四七八 忠岑）

好忠の作であっても、このように、特定の古今集歌をただちに想起させる歌は、積極的に採っているのである。

好忠とは対照的に、平兼盛の歌は『詞花集』の六首から、『後葉集』では十六首に増やされている。これは、前代の歌人としては例外的である。『後葉集』所収の兼盛歌は、三代集の類型的表現（「もしるく」、「きえせぬ雪」など）を含むものが多く、古今集歌に類似したものもある。為経は、三代集時代の詠風を代表する歌人として、兼盛を位置づけていたのであろう。『詞花集』撰者が好忠を尊重したのに対し、自分は兼盛を推すのだという意味あ

いが、歌数の増減に籠められているのではないか。

ところで、為経は、作歌活動をはじめたころ、父の主催した為忠家兩度百首に参加している。この兩度百首には、

けふはなほおきこぎいでしほとときすなくやまもとのあけのそほぶね（後度百首・船中郭公 顯広）  
けけらなくとりはたたちぬゆすずのむくのはかげにそぞろ風ふき（初度百首・樹陰納涼 仲正）

などの、万葉撰取歌や新奇な語をことさらに詠み込んだ歌が数多く含まれている。このような環境の中で、為経が万葉語や奇語に無関心であったとは思われない。ところが、二篇の百首歌を通じて、為経は万葉語や奇語をほとんど用いていない。おそらく、万葉語や奇語の使用に否定的であったのは、若い頃からの好尚によるのであろう。

『後葉集』では、『詞花集』のざれ歌的なものが多く除かれたという。<sup>(8)</sup>しかし、より正確には、万葉語や新奇な詞句を用い、それを眼目とした歌を排したというべきであらう。『詞花集』にはみえず、『後葉集』で新たに加えられた歌の中にも、

たつたひめもろこしまでもかよへばやあきのこずゑのからにしきなる（後葉集 卷五・秋上二七一 堀河）

という、発想上奇を銜った、ざれ歌的な作がある。為経の着眼点は、一首の発想法や全体の姿にあったのではなく、使われている語句そのものにあつたようである。

もっとも、万葉撰取歌や俗語を用いた歌が特に『詞花集』に多く採られているとは思われない。しかし、『詞花

『集』が万葉撰取歌を集の第一首目に置き、万葉語・奇語を多用した好忠の歌を最も多く採っていることは注意されてよいであろう。このあたりに、為経は『詞花集』に対して文芸上の不満を感じていたのであろうし、両者の理念の対立も存していたとみておきたい。

## 二 配列・構成をめぐって

為経が古今集歌と共通するないしは類似する詞句を有する歌を積極的に採っていることは、前節に述べたとおりである。このような歌のうち、巻頭や巻末に置かれているものは特に注目される。

まず、春上の巻頭歌、すなわち集の第一首目が、『古今集』を意識して置かれたものである。<sup>(9)</sup>

ふるとしにはるたつひ

延久第三親王

としのうちにはるたちくれればひととせにふたたびまたるうぐひすのこゑ（後葉集）

ふるとしに春たちける日よめる

在原元方

としのうちに春はきにけりひととせをこそとやいはむことしとやいはむ（古今集）

両歌は上句がほぼ一致している。『古今集』を意識して、わざわざこのような類似歌を巻頭に据えたこと、明らかであろう。詞書の記し方までも『古今集』に倣っているようである。ちなみに、『後葉集』に先行する勅撰集のうちで年内立春の歌を巻頭に置いているのは、『古今集』と初度本『金葉集』だけである。

『古今集』恋二の巻頭部には、夢を題材とした小野小町の詠三首が置かれていた。これに対応するかのよう

『後葉集』恋二の巻頭にも、夢に関する次の二首が並んでいる。

わがこひはゆめぢにのみぞなぐさむるつれなき人もあふとみつれば (三三二 伊家)  
 なぐさむるかたもなくてやゝみなましゆめにも人のつれなかりせば (三三三 公能)

『古今集』雑上の巻頭歌は、

わがうへに露ぞおくなる天の川とわたる舟のかいのしづくか (八六三 よみ人しらす)

という、七夕を題材とした詠であった。これに倣って、『後葉集』雑一の巻頭にも、七夕に関する次の歌が置かれている。

ひくみづもけふたなばにかしてけりあまのかはらにふなるすなとて (四三九 菅原為言)

この他、春下、秋上、秋下、物名、恋一、雑二(『古今集』は雑下)の各巻頭部と、春上、恋一、雑一(『古今集』は雑上)の各巻軸部についても同様のことがいえる。これらの部分では、『古今集』に倣って、その対応する位置にある歌と語句が類似する歌、同じ題材を扱った歌を意図的に配したのであろう。

『後葉集』は、その部立の構成上、『古今集』との近似がはなはだしいことが、谷山茂氏により指摘されている。<sup>(10)</sup>

『後葉集』の構成面における『古今集』との近似は、じつは、部立という大枠のみにとどまるのではなく、ときに、各巻の細部にまで及んでいる。以下、注目される点のうちのいくつかを指摘しておく。

①桜歌群を春上、春下に二分して配し、前半を咲く桜、後半を散る桜の歌群としている。また、秋下の紅葉歌群が菊歌群によって前半の色づく紅葉と後半の散る紅葉とに分けられている。いずれも、『古今集』と同様の構成である。

②『詞花集』では、帰雁の歌(33・34)が桜花群を前後に分かつ形でその中央部に位置し、呼子鳥(48)は桜歌群より後に置かれていた。『後葉集』では、これを改め、『古今集』に倣って、喚子鳥(29) 帰雁(30)の順で桜歌群の前に置いている。

表II 物名部の構成

古今集		後葉集	
うぐひす ほととぎす	鳥	うぐひす くひな	
うつせみ	虫	きりぎりす たるなむし	
うめ かにはざくら …… をみなへし …… なし、なつめ、くるみ	植  物	にはざくら もちつつじのはな しをに からはぎ をみなへし つき、すずむし、 もみぢ	
	月	十五夜月 くらげをうみの月と いふよし	
からこと …… かつらのみや	地名	かもがは しが、やはた	
百和香 …… (ながめ)	その他	おものだな かかげのはこ からにしき とくさ、むくのは くるみのから	

③物名部はほぼ全巻を通じて、『古今集』に倣って構成されている(表Ⅱ)。

④恋一の巻末部には、春(324)、夏(325～327)、秋(328・329)、冬(330)の順に各季の景物を詠み込んだ歌が並べられている。これも、『古今集』の同じ箇所倣った構成である。

⑤哀傷部の巻末には、自らの死が近いことを悟り思い嘆く歌二首が置かれている。これらは『詞花集』所収歌(363・361)であるが、哀傷歌群(392～408)とは別に位置していた。これを哀傷部に含め、巻末に配したのは、『古今集』に倣ったためであろう。ちなみに、自らの死を予見しての詠を哀傷部または哀傷歌群に含めるのは、八代集のうちでは、『古今集』の他、『拾遺集』と『新古今集』のみである。

⑥『後葉集』雑一は『古今集』雑上に対応している。構成を簡単に示しておく。

『後葉集』雑一 『古今集』雑上

A、雑	(439～452)	――	A、雑	(863～876)
B、月	(453～471)	――	B、月	(877～885)
C、老	(472～475)	――	C、老	(886～909)
D、水辺	(476～478)	――	D、水	(910～932)
E、名所	(479～488)			

⑦『後葉集』雑四前半は『古今集』巻二十に対応させる意識で編まれている。このうち、大嘗会歌に、

主基方御屏風に

藤原家経

うちむれてたかくら山につむ物はあらたなき世のとみ草の花（五六二）

これは後冷泉院御時みのゝくにのうたなり

のごとく、左注が付されている点も注意される。前掲歌は『詞花集』にも入っており、そこでは、通常の詞書の記し方がなされていて、左注形式ではなかった。それをことさら左注形式に改めているのは、『古今集』巻二十の次のような記載法に倣ったためであらう。

まがねふくきびの中山おびにせるほそたに河のおとのさやけさ（一〇八二）

この歌は、承和の御へのきびのくにの歌

この他、さらに細かい点を指摘していけば、枚挙にいとまないほどである。以上に挙げた点からだけでも、為経が『古今集』を手本のごとく常に座右に置き、逐一参看しながら撰集を編んでいったさまが、容易に想像されるであらう。

歌材の扱いの点からみると、先行勅撰集にあまり現れなかった夏部の蓮、冬の梅をとりあげ、逆に、先行勅撰集においてはぼ定着していた秋部の駒迎、冬部の鷹狩を省いていることが注意される。いずれも『古今集』の例に倣った措置であらう。上記のうち、冬の梅を入れたのは、『統詞花集』『千載集』『新古今集』等の先蹤ともなっている。このように、後代の撰集のさがけともいえるべき側面も『後葉集』には存していた。

春上の次の二首は、月を主題としている。

花のいろにひかりさしそふ春のよぞこのまの月はみるべかりける（六八 兵衛）  
 心してみるべかりけるはるの月ことぞともなくむかしこひらる（六九 輔仁親王）

梅などの他の題材を主とし、副次的に春の月が詠み込まれた歌は、先行勅撰集にも入っていた。しかし、月のほうが主とする春の歌は、『新古今集』に至って採られるようになるのであり、『後葉集』はこれに先立って春の月歌群を成立させている点、注目される。

⑥に示したように、雑一の巻末部には名所歌群が形成されている。これほどまでに顕然とした名所歌群は、先行勅撰集にはみられない。『千載集』雑上、『新古今集』雑中には、充実した名所歌群が現れるが、『後葉集』はこれらに先立つものであった。『能因歌枕』『五代集歌枕』の成立、諸書における歌枕の集成にみられる、歌枕としての名所への意識の高まりを反映しているのであろう。

ところで、前述の①②⑤の措置には、程度の差こそあれ、『詞花集』に対する批判意識を読みとることができるであろう。その意味では、次のような点も注意される。

『詞花集』では夏の部に入っていた神祭の歌を、『後葉集』は巻十九・雑四の神祇歌群に含めている。分類意識の差異が明確化しているところであり、『後葉集』の措置には、『詞花集』への批判を明らかにしようという意図が感じられる。

『詞花集』賀部では道長、上東門院関係の歌が強調されており、当代の詠が含まれていない。『後葉集』賀部は前半部分（230～238）と主として歌合歌から成る後半部分（239～247）に分けることができる。その前半部分の首尾に



は当代の詠を置き、特に崇徳院讃仰の色合いを濃くしている。政治的配慮からか当代詠の採歌に消極的であった『詞花集』とは対照的であり、そのような『詞花集』の態度に対する批判意識がかなり明確に窺われる。

以上のように、為経が集の配列構成にあたって、細心・周到な配慮を施していたことが知られる。『古今集』への復帰という点からみると、ときに細部にわたるまで『古今集』と同様の構成を示し、『古今集』の対応する位置に似たような歌が並ぶように配するという方法によって、復帰を成し遂げようとしていたことがわかるのである。

### 三 読人不知歌について

前節に触れた、古今集歌に類似する巻頭歌のなかには、読人不知のものもある。恋一卷頭もそのうちのひとつである。

題不知

読人も

をしなくあきのゝはらのしのすゝきしのびもあへぬこひもするかな（後葉集）

題しらず

読人しらず

郭公なくやさ月のあやめぐさあやめもしらぬこひもするかな（古今集）

ふたつの歌を比べてみると、極めて類似していることに気づく。どちらの歌も上句が序詞であって同音反復的に第四句を導き出し、結句を「恋もするかな」と結んでいる。そればかりでなく、両歌には、をし—郭公、なく—なく、あきの—さ月の、しのす—き—あやめ草、しのびもあへぬ—あやめもしらぬと、ほとんど逐語的な対応関係を

みることができる。両歌ともに、序詞に鳴く動物とそれと同季の植物を配しているのであるが、後葉集歌は、古今集歌の「郭公」を「をしか」に変えればただちに得られるといってもいい程の、ほとんど同工の作なのである。もちろん、序詞を用い「恋をするかな（かも）」と結ぶのは、恋歌の一類型であり、多くの類歌を見出すことができる。しかし、「郭公なくや」の古今集歌にこれほどまで類似した歌は、他にみられない。ここで考えてみたいのは、撰者為経が古今集歌と同工に仕立てた「をしかなく」の歌を自ら作り、読人不知としてここに置いたのではないかという可能性である。

この問題を考える上で、上條彰次氏の論考<sup>(12)</sup>は示唆に富むものである。上條氏は勅撰集の読人不知歌について考察され、『金葉集』と『続拾遺集』以下の勅撰集『風雅集』を除くには、撰者の改作歌・創作歌が読人不知として入れられている事実ないしは可能性を指摘された。上條氏の調査項目にならって、『後葉集』の読人不知歌についての数値を示すと表Ⅲのようになる。このなかで、『後葉集』の全歌数に占める読人不知歌の割合（Cの数値）が、三代集を除くどの勅撰集よりも大きいことが、まず注目される。それにもかかわらず表ⅢのEの値が比較的大きくなっているのは、『後葉集』には出所不明歌が<sup>(13)</sup>相対的に多いことを示している。このEの値が大きいというのは、上條氏が読人不知歌のなかに撰者の改作歌・創作歌を含むであろうとされた集

表Ⅲ

	A 総 歌 数	B 読 人 不 知 歌 数	C B の A に 対 す る 百 分 比	D 出 所 不 明 歌 数	E D の B に 対 す る 百 分 比
後拾遺	1218 首	58 首	4.8 %	5 首	9.2 %
続拾遺	1459	25	1.7	21	80.4
後葉	569	68	10.2	23	33.8

参考までに後拾遺集・続拾遺集のデータを  
上條論文によって掲げた。

と、同じ傾向なのである。

『後葉集』の読人不知歌に為経の自詠が含まれている可能性は従来指摘されていたが、<sup>(14)</sup>ここでは、前述のように、『古今集』への復帰のあり方との関係から考察してみたい。

例えば、次の旋頭歌についても、前述「をしがなく」の歌と同様の事情を考えることができる。

題不知

読人不知

むかしよりいかにちぎりをむすびてかとしたけくまにいろもかはらで二もとあるまつ（後葉集 卷十八・雑三五四〇）

題しらず

（よみ人しらず）

はつせ河ふるかはのべにふたもとあるすぎ年をへて又もあひ見むふたもとあるすぎ（古今集 卷十九・一〇〇九）  
 そうした眼で眺めると、『後葉集』春上の次の部分が注意される。

若菜の歌とてよめる

読人不知

きのふこそやくとはみしか春日野にいつしかけふぞわかな摘ける（二四）  
 かすがのは雪もけぬらん春雨のはればけふこそわかなつみてめ（二五）

百首歌中に春雪を

曾禰好忠

雪きえはゑぐのわかなもつむべきにはるさへはれぬみ山べのさと（二六）

右の引用は宮内庁書陵部蔵本（五一〇―一三三）に拠った。『後葉集』の伝本に関しては、松野陽一氏の論考がある。<sup>(15)</sup> 松野氏は諸本を甲、乙の二類に分けられたが、首肯すべき見解であり、名称も含めてこれに従うことにする。先の書陵部蔵本は唯一の甲類本である。この部分、天理図書館蔵本をはじめとする乙類の諸本は、15番「かすがのは」の歌を欠いている。甲、乙両類の関係については、松野氏の示唆されたように、乙類→甲類の順で成立しその間には撰者による改変が加わっているとみられる。<sup>(16)</sup> これに従うと、15番歌は乙類の誤脱とばかりは言えず、甲類原本の段階で新たに加えられたという可能性もある。この部分は、配列上、14・15が若菜、16が春雪を主題とする歌となっている。隣接歌相互の関係をみると、「春日野」「けふ」の語が14と15に共通して用いられており、一方、「雪消ゆ」「晴る」が15と16に共通している。このように、15番歌は若菜から春雪への移行を滑らかなものとする、配列上重要な位置を占めていることがわかる。また、15番歌は、『古今集』のほぼ対応する部分に位置する、次の歌と語句が類似している。

梓弓おしてはるさめけふふりぬあすさへふらばわかなつみてむ（古今集 卷一・春上二〇 よみ人しらす）

これらを勘案すると、甲類原本の段階で、より滑らかな配列となるよう、古今集歌の表現に倣いながら、15番歌を為経自身が詠出し、読人不知歌としてここに入れたのではないかと考えられる。

前節に触れたように、『後葉集』夏部には『古今集』に倣って、蓮の歌を採っている。この後葉集歌は、読人不知であり、古今集歌と共通する語句を含んでいる。

## (題不知)

読人不知

いさぎよくいけのこゝろやすみぬらむにごりにしまぬ花さきにけり(後葉集 卷三・夏二一〇)

はちすばのにごりにしまぬ心もてなにかはつゆを玉とあざむく(古今集 卷三・夏一六五 遍昭)

ところで、撰者為経の弟、寂然の家集『唯心房集』(寂然Ⅰ)、『寂然法師家集』(寂然Ⅲ)には、『後葉集』の読人不知歌が各三首ずつ含まれている。<sup>(17)</sup>前掲「いさぎよく」の歌も『唯心房集』に収められており、『後葉集』で読人不知とされているが、実は寂然の作と判明するのである。また、この歌については、為経・寂然の父為忠が主催した『為忠家初度百首』の折に詠まれた次の歌と、語句が一部共通していることが注意される。

にごりなくいけのこころやすみぬらんいまぞ蓮のあらはれにける(池上蓮 顯広)

臆測を重ねることになるが、為経の『後葉集』編纂に弟の寂然が協力し、読人不知歌の創作にも加わったのではないかと考えられる。『唯心房集』『寂然法師家集』はいずれも『後葉集』より後の成立と考えられており、<sup>(18)</sup>『後葉集』成立時の歌が含まれていたとしても矛盾はない。寂然は『為忠家初度百首』に参加していないが、内容を知る機会があったであろう。『古今集』に倣って蓮の歌を入れようと、それを求めていたとき、寂然は前掲「にごりなく」の歌を参考に「いさぎよく」の歌を詠み、これが読人不知として収められたのではないであろうか。

本節に述べてきたことの傍証を見出すのは、問題の性質上難しく、推測にとどまらざるをえない。しかし、撰者為経の『古今集』への復帰の志向の強さとそのあり方を考えあわせると、あなたがち荒唐無稽な空論とはいえないのではないか。

## おわりに

第一節に触れたように、為経が万葉語や奇語の使用に否定的であったのは、若年からの個人的好尚にかかわるようである。しかし、『後葉集』を編むころには、それがかなり自覚的なものになっていたと考えてよいであろう。万葉語や奇語の使用によって、歌に新鮮味がもたらされる場合も、確かにあったにちがいない。けれども、反面、それは和歌の美の本質的な部分を阻害しかねない。そのことを、為経は認識していたのであろう。そのような認識の上に立って、為経は歌に用いることばを伝統的な王朝和歌の歌語に限ろうとしたのだと考えられる。

そのことは、『古今集』への復帰をめざす方向性と密接にかかわり合っている。『後葉集』にかかる方向性の顕著にみてとれることは、第二節に述べた。この時期にこれだけはっきりと古今復帰の理念をうち出している点は、和歌史上、注目されてよいであろう。しかしながら、『後葉集』の古今復帰は、『古今集』の抒情性のきたる由縁を追究して、それを当代的に適用していくというような次元にはなく、専ら古今集歌の詞句を用いることを宗とし、集の形式をそのまま再現することをねらったものであったと考えられる。それは、『古今集』に絶対的な価値を認め、もう一度古今集歌と同じ詠風の歌を作っていくべきであるとの考えに立ったものであろう。しかしながら、古今集時代の詠風をそのまま復活させることは、当時不可能であったであらうし、それを試みたとしても、模倣作にとどまってしまい、歌に新たな生命力をふきこむことはできなかったであらう。

そうした点で、後の俊成や定家の認識とは異なるところがあったと思われる。『詠歌大概』の「詞以<sub>レ</sub>旧可<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>詞不可<sub>レ</sub>出<sub>三</sub>三代集先達之所<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>」という立言は、一見、王朝和歌の歌語にことばを限ろうとした為経の態度を軌を

一にするようにみえる。ところが、定家は後文で「としのうちに春はきにけり」につき「如<sub>レ</sub>比類、雖<sub>二</sub>句<sub>一</sub>更不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>詠<sub>レ</sub>之」と言っており、「としのうちに」の古今集歌と酷似する歌を巻頭に据えた『後葉集』撰者の認識とは、本質的に異なることが示唆されている。定家は古今集時代と当代の時代差を充分に認識し、『古今集』を古典ととらえて相対化した上で、その詞を用いながら「情以<sub>レ</sub>新為<sub>レ</sub>先」ことをめざしていたのであろう。為経には、そうした時代的認識が充分でなく、例えば、前稿に述べたように、『後葉集』の俳諧歌群にそれが顕現する結果となったのであろう。

一方、『後葉集』には、第二節に触れたような、後代の撰集の先蹤となる新しい側面も存していた。そこに中世和歌へとつながっていく部分を認めることができる。『後葉集』は、その周到な構成法により、撰者の和歌観を明確化していた。当時、私撰集が多く編まれたのは、それが各自の和歌観や理念を表明する手段であったからであろう。一個人の主張を表明する意味をもつ作品が、この時期に、かなりの完成度をもって出現している点は注目されてよい。さらに、第三節の読人不知歌の考察に当を得ているところがあるならば、上條氏が中世文学の性格として提示された「虚構的作為的構成性」が、私撰集という場をかりて、院政期にたち現れていることになるのであり、看過できない問題を含んでいるのである。

## 注

- (1) 桶口芳麻呂「詞花和歌集雑考」(『国語国文学報』5 昭和30・12)では、「久寿二年七月以降久寿三年正月以前」とさ  
れている。ところが、本集には後白河天皇の大賞会の際の詠(巻十九五六三 永範)が採られているので成立時の上限  
は、これの行われた久寿二年十一月とするべきであらう。

- (2) 『詞花集』が『堀河百首』の歌を二一首（全歌数の二・七％）含むのに対し、『後葉集』は三七首（六・二％）採っている。
- (3) 勅撰集・『万葉集』の本文・歌番号は『新編国歌大観』（角川書店）に拠り、『万葉集』は西本願寺本の訓を併記した。
- (4) 『後葉集』の本文は原則として天理図書館蔵本（五一〇・三三・イ一四三）に拠り、片仮名書きを平仮名に改め、私意に濁点を付した。歌番号は『新編国歌大観』に拠る。
- (5) 谷山茂「詞花集をめぐる対立——拾遺古今・後葉・統詞花の諸問題——」（『人文研究』13・5 昭37・6、谷山茂著）集三に所収）には、この頭輔歌について「いわゆる見立ての才を誇り一端の興に走った歌であろう」と述べられている。ここでは、なお別の角度から検討する。
- (6) 「そまがたの」は「総麻形乃（へそかたの）」（万葉集卷一九）の誤読から生じた語で、『和歌童蒙抄』『和歌色葉』『色葉和難集』『八雲御抄』等にとりあげられ、語義が問題にされている。「都のてぶり」は『奥義抄』『和歌童蒙抄』『袖中抄』『古来風躰抄』等に言及されている。
- (7) 私家集の本文・歌番号は『私家集大成』（明治書院）に拠り、私意に濁点を付した。
- (8) 谷山茂「千載集と諸私撰集——類型と個性に関する基礎的一調査——」（『人文研究』2・11 昭26・11、著作集三所収）、注1樋口論文、注5谷山論文。
- (9) 注1樋口論文、注5谷山論文にも言及されている。
- (10) 注8論文。
- (11) 有吉保『新古今和歌集の研究——基盤と構成——』（昭43・4 三省堂）参照。
- (12) 上條彰次「中世和歌史論——勅撰集読人しらず歌をめぐる——」（静岡女子大学『国文研究』19 昭61・3）。
- (13) 現在のところ14 15 29 35 70 71 74 111 115 163 170 186 226 275 276 286 287 293 326 330 384 408 540の各歌が出所不明。
- (14) 注8谷山論文、松野陽一「後葉和歌集私注二点」（『和歌史研究会会報』43 昭46・9）など。
- (15) 松野陽一「後葉和歌集本文考」（『平安朝文学研究』3・2 昭46・12）
- (16) 注15論文。なお、哀傷部41番歌の詞書の異同等が先後決定の手がかりとなろう。
- (17) 注14の各論文に指摘がある。



(18) 『私家集大成』の解題参照。

(19) 拙稿「後葉和歌集の俳諧歌」(『詞林』3 昭63・5)

〔付記〕脱稿後、松野陽一校注『詞花和詞集』(和泉書院 九月二十七日刊)が出版された。新しい見解・指摘に触れて再考の必要を感じる部分もあるが(特に巻頭歌の問題など)、いまは執筆時のままとしておく。

(大学院後期課程学生)